Nag tsho Lo tsā baについて

川 越 英 真

0. はじめに

Nag tsho Tshul khrims rgyal ba（以下、Nag tshoと略称）は11世紀のチベット人翻訳師（Lo tsā ba）である。Nag tshoは翻訳師として数多くのインド語仏典をチベット語に翻訳し、それらがチベット大蔵経に収蔵されていることは大蔵経目録から知られる。彼が通称‘Nag tsho Lo tsā ba’とか‘dGe bṣes（/Slob dpon）Lo tsā ba’と呼ばれるほど多くの仏典の訳業に携わった背景には、インドの学僧Atiśa（/Atiśa=Dipamkaraśrijñāna：A.D. 982-1054）をチベットへ招請することに成功し、その側近の弟子として長く師事したことが大きくかかわっている。

今日に伝えられるAtiśaの伝記のうちで、編纂年代が最も古いと見なされるBya ḡdun ḡdun pa²（1091-1166/1100-1174）編著のNGA³は、Nag tshoが師Atiśaの遺徳を讃えた『八十讃（bsTod pa brgyad cu pa）』と、弟子Roṅ pa Phyag（/Lag）sor ba⁶の求めに応じてNag tshoが物語った、師に関する話に基づくと伝えられる。だとすれば、Atiśa招請の経緯やチベットでのAtiśaの仏教活動の様子など、Atiśaにまつわる伝承は少なからずNag tshoに由来するものがあるはずである。その意味で、Nag tshoは翻訳師としての事績もさることながら、流伝後期（Phyi dar）のチベット仏教の発展に多大な影響を及ぼしたAtiśaの生涯が、チベットに伝承される上で果たした役割も評価されるべきであろう。

本稿は、チベット訳経史研究の一環としてNag tsho翻訳師を採り上げ、まずNag tshoが翻訳師として活動する前提となったAtiśa招請の経緯を、Atiśa伝（NGA, JNY）等のチベット史書類に基づいてとり、次にNag tshoの本領といえる翻訳師としての事績を、史書類と蔵経本の奥書等を対照して検討しよう。

1. Atiśa招請使としてのNag tsho

Nag tshoの生年はA.D. 1011年〈今をと玄〉で、生地はチベットMaṅ yul地方Guṅ tħaṅ地方のIHa can gdoṅ³³である。彼が（dGe bṣes）Guṅ tħaṅ paと称されるのは、その出身地にちなんだものであるが、律にも精通していたのでḏuṅ ba ḡdun pa（持律師）と呼ばれることもある。Nag tshoの生い立ちは詳らかでないが、その名前が歴史上に登場するのは、彼がAtiśaを招請する使者としてGu ge王国のIHa btsun pa Byaṅ chub ḡod王によってインドへ派遣される二代後半からである。
Gu ge 王国は当時の西チベット mNāḥ rīs 地方が Mar yul, Gu ge, Pu raṅ の三地域（mNāḥ rīs skor gsum）から成るうちの、Mar yul と Pu raṅ とが択まれ、Manasarovar (Ma pham mtsho) 湖の西北の地域に位置する。その Gu ge 王国は吐蕃王朝崩壊後、一時衰退していたチベット仏教が 10 世紀後半から復興されて行く活動の拠点となった。その最大の要因は Gu ge の王室が篤く仏教を信奉したことにある。

特に、10 世紀後半から 11 世紀中ごろにかけての lHa bla ma Ye sses ḍod 王とその甥の子の lHa btsun pa Byaṅ chub ḍod 王の治世中は、多数の寺院建立や仏典翻訳事業などの仏教活動が目覚ましく、西チベット地方から仏教が復興する原動力になった。そうした活動の一端にインド、カシミール地方からのパンディタ (Paṇḍita) の招請があった。Ye sses ḍod が Rin chen bzas po らの青年たちをカシミールへ遊学させたのも、自国の優秀な人材を仏教者として育成するためだけでなく、仏教の盛んなカシミールから学識に富む仏教者を招いてチベット仏教を再興する意図があった。

最初に Atiśa を mNāḥ rīs へ招請しようとして企図したのも Ye sses ḍod という。彼の下命を受け、その招請使になったのはチベット中央部の gTsaṅ 地方 sTag tshal14 出身の優婆塞（Upāsaka）rGya brTson ḍgrus seng ge である。rGya は多くの従者を連れてインドの Vikramaśīla 寺15 に赴き、その寺の学髄を務める Atiśa に会い、多量の黄金を献上してチベットへの巡錫を懇願した。これに対して Atiśa は、自分がチベットへ行くには二つの動機が必要であって、一つは黄金を欲すること、もう一つは自分より他人を大切にする菩提心を有すること、という二点を挙げ、自分には両方とも存在しないと言って rGya の招請を断った16。しかし、この拒否の理由が単なる口実にすぎないことは、後にチベットを巡錫した Atiśa が各地で多くの黄金の布施を受けていることや、Atiśa 自身が菩提心法者17 と称されるほど Vikramaśīla 寺にいた当時から菩提心の修行を励み、自らも慈悲の菩提心によって人々の利益を行っていたことからも明らかである18。

こうして、rGya は招請使としての目的を果たせないまま、失意のうちにチベットへ帰国したが、Atiśa を慕う気持ちは強く、再びインドへ行って Atiśa から教えを受ける準備をしていた。そのころ、二十代半ばに近い Nag tsho は rGya に初めて出会った。これ以前の Nag tsho が仏教者としてどのような道を歩んで来たか明らかでないが、当時すでに出家し比丘になっていたと見られる19。rGya に出会った Nag tsho は阿毘達摩 (Abhidharma) の聴聞を請うが、rGya はインド留学を理由にそれを断った。そこで Nag tsho が随行を願い出たところ、それは許されて rGya に従って初めてインドへ行くことになった。そしてインドでは rGya から阿毘達摩の聴聞をし、また仏典翻訳の仕方を学んで、いくつかの仏典を翻訳したといわれる。Nag tsho はその仏典の将来と学習の調達のため 2 年後にチベットにに戻ったが、他方 rGya はそのまま Vikramaśīla 寺に留まって、Atiśa のもとで学問を続けた。Nag tsho の帰国を待っていたのが、Ye sses ḍod の遺志を継いで Atiśa を招請しようと思っていた Byaṅ chub ḍod である。
ところでは、Ye şes ḥod と Byan chub ḥod の関係はチベット文献では、例えば 'IHa bla ma Khu dgon' と表現されることがある36。この場合の 'Khu dbor (伯/叔父・甥)' とは Ye şes ḥod と Byan chub ḥod の二人を意味するが、ḥod sruṅの子孫の系譜42によれば Ye şes ḥod と Byan chub ḥod はおじと甥の子という関係で表われるものが多い。すなわち、Ye şes ḥod の兄弟 (Khor re または Sroṅ ṇe) の子が IHa lde で、彼に三人の子がいるうちの一人が Byan chub ḥod とする。IHa lde は Rin chen bzaṅ po に筆頭国師 (dBuḥi mchod gnas) と金剛阿闍梨の位を授け、また Khwa char 等の寺院を建て、そしてカシミールの大パンディタと称される Subhūtiśrīśānti を招いたと
いわれる37。従って、Gu ge 王国の王位は Ye şes ḥod、Khor re または Sroṅ ṇe、IHa lde、Byan chub ḥod という順に継承されたと見られるが、この問題はチベット史書間の記述が異なって一致を見ない。

さて、Byan chub ḥod は Guṇ than に戻っていた Nag tsho を呼び寄せで、チベット仏教の堕落した実態と Atiśa の招請に失敗したことを嘆いた。そして Atiśa を招請出来れば最上であるが、出来なければ別のパンディタを招く使者としてインドへ行くよう要請した。これに対して、Nag tsho は最初、自分の勉学の障害になるし、その目的も遂行できないと言って依頼を断るが、結局、Byan chub ḥod の熱意に負けて不本意ながら使者の役引き受け、再びインドに行くことになった。それは Nag tsho が 27 歳 (A.D. 1037) の時であったという38。こうして Nag tsho は従者を伴ってインドの Vikramaśīla 寺に赴いた39。その寺では以前に師事した rGya が仏教の研鑽を積んでいたので、後に再会して来寺の理由を話した。rGya は多くのパンディタの名前を列挙して、チベット利益できるのは Atiśa を招いて他にないので、あくまで Atiśa を招請すべきだと Nag tsho に教示した。

Nag tsho は自分の師であり、また自分よりインド滞在が長く、インドの言葉にも熟達している rGya に全幅の信頼を置いていたであろう。それは例えば、rGya の案内によって Nag tsho が Atiśa と面会した時、Atiśa にチベットへの巡錦を願い出たのは使者役の Nag tsho ではなく、rGya であったことから観われる。すなわち、その際に rGya は、チベットでは昔から王が仏教を信奉して流布するが、Dar ma の破仏を被った後、仏教を再興して順応した法を正すため、Ye şes ḥod と Byan chub ḥod が Atiśa の招請を切望してどんなに難儀しているかなどを切々と訴えたという。この時の rGya はおそらく以前、自分が招請役の責任を果たせなかった苦い経験を思い、Nag tsho のためにいわばチベットの命運を担っているかのような気持ちで熱弁を振るったことであろう。ところが、同席した連れの Nag tsho がその時 Atiśa に対してどのような発言をしたか、何も教えられていない。

この想議に対して、Atiśa は自分が年老いていること、寺の管理や多くの仕事を残していることからチベットへ行けないと、もし行けばチベットの衆生を利益できるかどうか検討しよう、と答
えた。そして、Atiśa は自分の守護尊であるタラー（Tārā）に伺い立てた結果、生命は短くなるがチベットを利用することがわかったので、行うことを決定する。そして、後に Nag tsho の来寺の目的が露見して、寺の枢要な地位にある Atiśa のチベットを行いを阻止しようとするとする者もいたが、結局、3 年ほど Atiśa を Nag tsho に委ねるという約束で容認された。こうして Nag tsho が招請使として Vikrāmaśīla 寺に到着してから弟子の rGya ら従者と共に Atiśa がチベットへ向けて出立するまでに 3 年、足かけ 5 年の年月が経ったという。Atiśa らのインド出立の年代に異説はあるが、今は Atiśa が 59 歳の〈金のえ辰〉の年、すなわち A.D. 1040 年出立の説に従う。

以上、Nag tsho が Atiśa の招請使としてインドに足を踏み入れ、招請することに成功してインドを出立するまでのお話は、この経緯をチベット史書に基づいてたどった。Nag tsho は時点、私が著述(=Atiśa)をチベットに招請したのであると自負するように弟子に語り、後世には今日の幸福は Nag tsho の恩恵であるという評価を受けていている。確かに、招請使としての任務を果たしたのは Nag tsho ではあるが、隣の功労者と見なされるのが、弟子の Nag tsho に全面的に協力した rGya である。なぜなら、前述したように、Nag tsho が Atiśa と対面した時、Atiśa にチベット巡錫を訴えたのは rGya であり、Atiśa にとっても rGya の存在は、高齢にもかかわらずチベットへ行く决心をした一つの要因になったと考えられるからだ。それを端的に示すのは、Atiśa がいざ出発する段になって、rGya も一緒に招くよう Nag tsho に対して要求したことである。そのこと、rGya は Nālandā で御病に罹っていたので、 أغ精子乗せて一緒に連れて行ったという。そこでして rGya を帯同したわけは、おそらく rGya に通訳の役をさせるつもりだったからと思われる。そのことは rGya がネパールで死んだ時、Atiśa は自分の舌が切り取られてしまったので、チベットを利用できない。とうチベットに行く意味はない、と嘆いたことからもわかる。Atiśa が Nag tsho よりも rGya の方を頼りにしていたことを如実に物語っている。不幸にも、rGya はチベットへ帰国する途中で病死したため、彼の評価が忘れられ、結果的に Nag tsho が Atiśa 招請の功を一人占めにしたともいえるであろう。

2. 翻訳師としての Nag tsho

チベット大藏経には Nag tsho が翻訳・校正者として記載される典籍は、Atiśa 小部集に重複するものを除いておよそ百典ある。それらの藏経本の要書から Nag tsho の共訳者名は知られるとしても、訳経処を記すものは少数であり、さらに訳経年代まで記すものはわずかなに一例しかない。従って、これは蔵経本全体に通じることであるが、訳本の奥書から訳経処を知ることはあまり期待できないし、訳経年代も訳者の生没年に変わる場合、せいぜいその範囲内に限定できる程度でしかない。

そうした蔵経本の訳経事情を少しでも明らかにするため、以下に Nag tsho の翻訳活動を見る
に際して、便宜上、Nag tshoがrGyaに随行して初めてインドへ遊学し、そこで翻訳の仕方を学んでから後の、主としてAtiśaに師事していた時期を翻訳活動の前期とし、Atiśaの亡くなる前年に彼のもとを離れてJhānākaraに師事して以降の時期を後期として区別する。そして前期に関してはAtiśa伝(NGA, JNY)やDNG, KCS等の史書類にNag tshoの訳経活動が具体的に伝えられているので、それをチベット大蔵経目録および蔵経本の奥書と対照して訳者、訳経処、訳経年代などを検討しよう。

2-1. インドでの翻訳

まず前期の訳業から見てみよう。Atiśa伝によれば、Nag tshoは最初の訳業をインドで手がけ、後にAtiśaの側近としてパーパール、チベットへと行動を共にしてしながら諸処で翻訳活動を継続している。従って、その活動の道筋をたどれば、Nag tshoの翻訳順序とその年代をある程度限定できる可能性もあるであろう。以下はそうした視点からの一つの試みである。もちろん、それが妥当性を持つには、訳本の内容からの検証や典拠史料の信憑性、あるいはAtiśaの年代論等などの多面的な検討が必要不可欠であることは言うまでもない。

さて、Atiśa伝(NGA, 48a)によれば、Nag tshoはrGyaと共にインドへ行き、2年ほど滞在した間にrGyaから阿毘達磨を聴聞しただけでなく、仏典翻訳の仕方も学んで熟達したのでインドでも仏典翻訳を行ったという。すなわち、Nag tshoはVikramāśīla寺で、bden pa gthos la Ḥjug pa(Satyadvyayatātra入二譯)とその注釈、Atiśa作stīrī po bsdlu ba(Garbhāsāngraha心髄撮集)とSaḥī sāhī po(Kṣitigarbha)作のその注釈、dBu ma rin po che ji Ḥphre ni ba(Madhyaṃakaratnamālā中蔵宝鬘)などをrGyaに共に翻訳し、またSomapuri寺ではrDo rje chos kyi glu(Vajrayadharmagiti金剛法歌)、YogacaryāとそのPīṇḍārthaを訳出して、それらをチベットに将来したといわれる。

このうち、チベット蔵経本に対応する題目を有するのは、最初の二典の入二譯[T.3902(=4467): P.5298(=5380)]と心髄撮集[T.3949(=4469): P.5345(=5382)]であるが、蔵経本の奥書は訳経の場所が記されていない点と、訳者名が『入二譯』はAtiśaとrGyaの二人を、そして『心髄撮集』はAtiśaとTshul khrims Ḥbyun gnas deb rtse(=tse)という二人を記して、Nag tshoの名前を見ない点でAtiśa伝と一致しない。しかし、『入二譯』はAtiśaがSuvarṇādviṭṭa(gSer glिन)のgSer glिन pa77のもとで学んでいた時代に、Bhavyaの『中観宝灯』[T.3854: P.5254]に随行して著作されたといわれる78。それに従うならば、AtiśaのSuvarṇādviṭṭa時代に、まだチベット語に翻訳する機運は生まれていないわけであるから、その訳出はインドに戻ってからのことである。『中観宝灯』はNag tshoがSomapuri寺でAtiśa,rGyaと一緒に訳出したとその奥書にあるので、『入二譯』の翻訳もその奥書とNGAと述べられるrGyaがかかわたったとすれば、彼の存命中のインドで、しかも在留先のVikramāśīlaで行なわれた可能性が大きいであろう。
また、「心髄撮集」は、後述するsNe thǎnで翻訳されたと見なされる「心髄要軽」[T. 3950 : P. 5346]の中の多少の異字は見られるが、明らかに「心髄撮集」の本文とわかるものが、ほぼすべて含まれている。両本とも著者はAtiśaであり、また「心髄要軽」の訳者をAtiśaとNag tshoとするかから、この「心髄撮集」も同一の訳者によって訳出された可能性が大きいであろう。すなわち、蔵経本の奥書に記すTshul khrims ḥbyuṅ gaas deb rtseという人物がAtiśaの周辺に見られることから、Nag tshoの名のTshul khrims rgyal baが誤記されたことが十分に考えられる。


このようにAtiśa伝と蔵経本の奥書に従えば、Nag tshoはインド滞在中にVikramaśīla等の寺院で訳業に携わったことになる。その時期はAtiśa伝によればNag tshoがrgyaに随行して初めてインドに留学していた時代からとするが、奥書からはそれを知ることができない。いずれにしても、インドでの訳業はNag tshoにとって初期のものであり、年代的にはAtiśaがインドからチベットに向かって出立したA.D. 1040年以前に限定できるであろう。

2-2. ネパールでの翻訳

Atiśaたちの一行がインドからネパールに到着、もしくは滞在した年代はA.D. 1041（金のと日）の年という（DNh, ca. 3b; KCS, 48b）。一行はチベットに向かう途次、約1年間ネパールに逗留するが、その間、Atiśaは説法、寺の建立などの他に、Nag tshoと訳業に携わっている。

Atiśa伝(NGA, 56b-57a; JNY, 47a)は次のように述べる。当時AtiśaがNayapāla王に送った手紙はAtiśaとNag tshoの二人が翻訳した。そしてAtiśaがネパールのHol khaという所に、友人の賢者の長老の施主によって1ヵ月滞在した時、長者が「真言ではない、波羅蜜の見解を昼夜で仕上げて下さい」とAtiśaに願い聞いた。そこでAtiśaが「長者は真言を信じないが、真言と波羅蜜の両方に菩提成就の方法がある」とおっしゃって、著作されたのがsPyod pa bsus du paṣeiā brgya rgyan me (Caryāsāntadhyapradipa「行集論」)で、AtiśaとNag tshoの2人が訳出した、と述べる。

このうち、前のNayapāla王に送った手紙は、「無垢宝書翰」(Vimalaratnalekha)[T. 4188 (=4566): P. 5688 (=5480)]という題目で大蔵経に収められている。その奥書に、「無垢宝書翰」はDipamkaraśrījānaがNirvaphala(=Nayapāla)に送ったもので、その当時、師(Bla ma=
Atiśa）と翻訳師比丘 Tshul khrims rgyal ba（＝Nag tsho）が翻訳した旨を述べる。しかし、手紙の本文11や奥書の記述からは、Atiśa がいつ、どこから手紙を送ったか、また翻訳した「その当時」とは一体いつの時点を指すのか、等々を知ることができない。それに対応する記述を Atiśa 伝に見るならば、手紙は Atiśa がネパールに滞在していた当時にネパールから送られ、そのチベット語への翻訳もその時に因まれたことが知られる。

Atiśa が手紙を宛てた Nayapāla とは、8世紀から12世紀にかけて東インドのベンガルとベーラール地方を支配したパーラ王朝の第11代の王で、11世紀前半ころに活動した人物である。パーラ王朝は歴代の王が仏教を信奉し、寺院の建立等の護持活動をしているが12、Nayapāla も篤信の仏教徒（Parama-saugata）であったことが明らかである13。Nayapāla の治世を在位15年のA.D.1027-1043とする見解14に従えば、Atiśa が Vikramaśīla 寺の学頭を務め、その後ネパールを巡錫していた時期はその王の治世中に相当する。

Nayapāla と Atiśa の因縁は Nag tsho の『八十諦』15に基づいて Atiśa 伝（NGA, 36a-b; JNY, 32a-b）に、あらかじめ次のように述べる。

Atiśa が金剛座（Vajrāsana）にいた当時、Magadhā の王 Nayapāla と西方 Kaṇḍa の外交使（Tirthika）王との戦争になり、Kaṇḍa の王は Magadhā に軍隊を率い、都城を耐えられず、住居地に軍隊が侵入して、四人の出家者と一人の優婆塞の五人を殺した。また多くの物資も略奪した。その時 Atiśa は懸命怒ることなく、慈悲と菩提心を修習していた。そのころ、Nayapāla によって Kaṇḍa の軍が撃退され、その兵が殺されることに Atiśa は耐えられず、Kaṇḍa の王とすべての兵を護って去らせたので、Kaṇḍa の王は Atiśa を尊仰して、西方に招いて敬意した。Atiśa も二人の王を和解させ、生活の物資以外の手元あるすべてのものを和解するために手放した。また Atiśa は身命を顧みることなく、大河を何度も渡り、その二人を和解させ親友にさせて人々を安楽にして、と述べる。

この Atiśa 伝の記述が、どの程度史実を反映しているかは別にして、こうした捜拝やネパールから手紙を送ったことから見て、Nayapāla と Atiśa とが親密な関係にあったことを物語っている。

次に後者の『行集燈』[T.3960（＝4466）：P.5357（＝5379）]は、その奥書を見る限りでは前述の著者が訳者名以外の情報は得られないが、本文（DE.312b-313a）には Atiśa 伝に対応する内容が見られる。例えば、「秘密真言はここでは説くまい。波羅蜜多の行である菩薩行を私が寛略に解説しよう」（312b）、「秘密真言道を信解しないならば、以上に説いた如くならせよ」（313a）、「ネパールの国で、自分の友人が勤めたので（『行集燈』を）著作した」（313a），といった記述は Atiśa 伝に符合するものといえる。

ところで、Atiśa はネパール滞在中に Thañ（／Tham）viharā という寺を建立したといわれるが16、他にも王の建立した Rāja viharā という寺があったとする。Atiśa 伝はこの寺から得られた四つの仏教とその Nag tsho 訳について述べるが、類似の内容は肝心な点が食い違っていくつ
かの史書類に伝えられている。チベット史書における伝承の様態という観点からも興味深い話であるから、それを次に見よう。

さて、Atiśa 伝 (NGA, 57a；JNY, 47a-b) は次のように述べる。

ネパールの Rāja vihāra という寺院から、出生地が Guñ thawän で郷里は dBus 地方である rNgön Rin can (chen) rgyal mtshan としが、rDo rje ḍbyun ba (Vajrodaya 『金剛出現』), gTsug tor dgu pa (九頃鬘), Kham gsum rnam par rgyal bṣaṅ dkyil ḏkhor gyi cho ga (Trailoc-kyavijayamaṇḍalīdhi 『三界勝曼荼羅儀軌』), sTod ṭigrel (『前半の注釈』) という四つの仏典を入手して、Atiśa に『秘密会集』 (Guhyasamājā) の法部類を請問する礼物として差し上げた。それらは Atiśa と Nag tsho 翻訳師の二人によって翻訳されたが、『前半の注釈』に関しては、Atiśa が自分で翻訳したため悪い訳になったものである。後にその訳本を Byan chub ḏod が夜に見ることで、こっそり盗み書きしたものが有るが、それは Maṅ yul に残されて、チベット中央 41 に基づき伝えられなかったもの、と述べる。

上記の四典がチベットへ将来される経緯は、他に NBH, KRN, KCS, CMB 等のチベット史書類に類似した内容が伝えられているが、その四典を誰が誰に対して献上し、それを誰がチベット語に翻訳したかという重要な点で文献間の一致を見ない。

例えば、NBH (74b-75a) は rNgön Rin chen rgyal mtshan から『秘密会集』部類の請問の礼に四典を献上された人物を Atiśa ではなく、大翻訳師 (Lo chen) Rin chen bzaṅ po とし、その翻訳に関しては、Rin chen bzaṅ po と彼がカシミールへ三度目の留学をした時に出会った、ウディヤーナ (Udyāna) 出身の阿闍梨 Buddhāśānti (Saṅs rgyas shi ba) とで四典を共訳したとする。また『前半の注釈』を単独で訳したのも Atiśa ではなく、Rin chen bzaṅ po とされる。

これに対して、KRN (44a) と KCS (69a) は小翻訳師 (Lo chuṅ) Legs paṅ śes res rab がネパールの Thāṅ vihāra で rNgön Rin chen rgyal mtshan の紹介によって Atiśa に面会した時、『秘密会集』の法部類を請問する礼物として四典のインド本を Atiśa に差し上げたので、それは Atiśa と Nag tsho によって翻訳されたと述べる。このように共訳者に関しては NGA と同じであるが、ネパールの寺院名を Rāja vihāra ではなく Thāṅ vihāra とし、四典の献上者を rNgön ではなく、Lo chuṅ とする点や『前半の注釈』の単独訳の点に触れない点は NGA や NBH と異なる。

一方、これらの史書の中で最も古い成立と見られる CMB (502a-503a) は、NBH に類似する四典の入手経緯とその訳経した場所について、あるまし次のように述べる。

rNgön Rin chen rgyal mtshan がネパールの Vihāra という寺から入手した四典のインド本は、『秘密会集』の Jñānapāda 流の灌頂と法を請問するために Rin chen bzaṅ po に差し上げた。またその翻訳は、Rin chen bzaṅ po が Mar yul sum mdo の ṇar ma 57 寺でバディィタ Buddhāśānti, Buddhāpāla, Kamalagupta の三人と会い、請願して多くの法を翻訳した 58 で、その時、『九頃鬘』や『金剛出現』等の詳細なマンダラ儀軌をすべて翻訳したと述べる。

以上のように、各文献間の筋書きは似通っているものの、Atiśa が四典を献上されて Nag tsho
Nag tsho Lo tsa ba について

と一緒に入翻訳したのか、あるいは Rin chen bzaṅ po が献上されて、その翻訳にも携わったのか、という肝心な点が相違する。そこで、この問題をさらに蔵経本の奥書等で検討しよう。


そして、『前半の注釈』の翻訳事情は前述のとおりだが、『後半の注釈』はネパールのバンディタ Thugs rje chen po (Mahākāśyapa) 62 と翻訳師 Zaṅ dkar 63 が Nār ro (\
Ye) で Jo sras とCe Žbar が施主になって翻訳したといわれ (NBJ, 85a ; MTL, p. 67), この訳者から判断すると『前半の注釈』より後の、11 世紀後半の翻訳と見られる。こうした事情は『真性光』の奥書や東北・北京目録から知ることができないが、附属目録部 64 では、第一品は翻訳師 Rin chen bzaṅ po の翻訳、それ以降はバンディタ Thugs rje chen po と翻訳師 Ḫphags pa šes rab の翻訳と記してあって 65、『真性光』に同じ訳者によって全訳されていないことが知られる。

以上に見できたように、四典の蔵経本の奥書や附属目録部の中には Atiśa と Nag tsho の名前はどこにも現れない。Atiśa と Nag tsho の訳本が大蔵経中に採用されなかった可能性がないわけではない。だが、カシミールのバンディタに主として瑜伽タントラの聴聞を重ね、その部類の訳業も多く手がけた Rin chen bzaṅ po に対して、Atiśa は無上瑜伽部の特に母タントラ部類の密教を本領とする 66 という両者の特徴の相違を考えると、瑜伽タントラに関しては Atiśa よりも Rin chen bzaṅ po の方が勝っていたと思われる。実際、そうした傾向も伝えられている。すなわち、Rin chen bzaṅ po は、その晩年に mNāḥ ris に招かれた Atiśa にも師事して多くの聴聞と翻訳をしたが、ある時一度、『金剛出現』を聴聞した時、瑜伽タントラに関しては自分の方が勝れていると思わせる説法であったようで、以後、瑜伽タントラ部類の法は聴聞しなかったといわれる (cf. NBJ, 76b, 85a)。

いずれにしても、四典訳出の件のような混乱した記述は、一般的に宗教的飽和の濃いチベット
史書には珍しい事例ではないけれど、その当否を弁別するのは困難を伴い、多分に問題を残さざるを得ない。

2-3. チベットでの翻訳
－mNaḥ risでの翻訳－
さて、Atiśaはネパールで1年を過ごした後、一行はチベット国内に入った。ネパールと国境を接するチベットのMaḥ yul地方に赴き、Nag tshoの出身地であるGuṅ thañ地域にNag tshoの施主によって1年ほど滞在した。そのこと、Atiśaはチベットに水供物（Chab gtor）の流儀がないことを知り、作（Kriyā）ダントラの六真言と六印契によって清浄に行う容易なものがあるとしてChab gtor ḫjam chuṅ maをGuṅ thañのKha mo gra ma gdoṅという所で作った。それは今日Dipaṃ maと称されるという（NGA, 57b ; JNY, 47b-48a）。これは蔵経本の「水供物儀軌」[T. 3779: P. 4597]に比定される67と見られる供物儀軌であるが、その奥書（DE. 221b: PE. 439b）によればKan（sKan）ston Legs paṅ śes rabが資糧（Sambhāra）を積むための一部として請うてMaḥ yulの町68で著作され、AtiśaとNag tshoが翻訳したという。

その後、Atiśaは当初の目的地Gu geのmTho ldiṅ寺に到着し、Byaṅ chub ḥodらの大歓迎を受けた。この寺はRin chen bzaṅ poがYe śes ḥodの援助のもとに建立した寺で、Rin chen bzaṅ poが住持を務めていた。AtiśaはGu geでの1年を主にこの寺に逗留して説法、著述、翻訳等を充実した仏教活動を行っている。Atiśaの主著の『菩提提灯』[T. 3947 (=4465); P. 5343 (=5378)]がmTho ldiṅ寺で作られたことは確かであるが69、おそらく同じころに自著[T. 3948: 5344]も著作されたと考えられる。『菩提提灯』とその自注とは何故にかAtiśaの共訳者が相違しており、前者はmNaḥ ris地方で活動した翻訳師Ma dGe baiḥ blo grosで、後者はNag tshoである。『菩提提灯』の奥書や附属目録部には、どこで訳出されたかまでは記さないが、Atiśa伝（NGA, 63a ; JNY, 52b）はmTho ldiṅ寺で翻訳されたと述べる。本来、『菩提提灯』の著者はByaṅ chub ḥodの要請によるものである70。その簡潔な仏文の内容を理解するために詳細な自注が用意されるのは当然のことである。従って、自注もByaṅ chub ḥodのために同時的にmTho ldiṅ寺で著作され、翻訳されたと考えられる。

うであれば Nag tsho 訳とする Atiša 伝とは一致しない。

Atiša が mNāḥ ā riṣ に滞在した年数は 3 年とされる (DNG, ca. 5b ; KCS, 50b)⁷⁴。しかし、この 3 年というのは目的地 Gu ge⁷⁵ に到着する以前に Maṇīyul⁷⁶ で 1 年を過ごし、そして Gu ge を去ってインドに帰国する予定で Maṇī yul に下って再度その地方で 1 年を送っているから、実際に Gu ge 地方にいた期間は約 1 年と見るべきである。その年代は、Nag tsho が 31 歳の〈火のえ午〉の年に mNāḥ ā riṣ に到着したという (DNG, ca. 3b; KCS, 48b–49a)⁷⁸、この場合の mNāḥ ā riṣ 到着は Bīạ nyuḥ 頚 の持ち受ける Gu ge に着いた時点を指すのであろう。その〈水のえ午〉の年は A.D. 1042 年に相当する。従って、mNāḥ ā riṣ 地方にでの Atiša の著作や Nag tsho との訳業はその前後の時期のものといえる。

—a bSam yas での翻訳—

Atiša らの一行が hBrom ston⁷⁹ の招請に応じて、インドへの帰国を変更してチベット中央地方へ向かい、gTsāṅ 地方にの巡錫を経て、dbus 地方の bSam yas 寺に到着したのは〈亥 (Phag)〉の年という (NGA, 73a)。この年代に関しては、同じ Atiša 伝でも NGA と JNY とで見解を異にし、JNY は〈未 (Lug)〉の年とする⁸⁰。しかし、この〈未〉の年はすでに検討されているように⁸¹、JNY に述べる他の年代と矛盾する問題があって採用できない。従って、今は〈亥〉の年を〈火のと亥)⁸² の A.D. 1047 年とする説を採る。

さて、bSam yas 寺は 8 世紀後半の Khri sroṅ lde brtsan 王の治世に建立され、当時の国家仏教の中心的な役割を担った大寺院である。しかし 9 世紀中ごろの吐蕃王朝の崩壊とその後の仏教衰退期を経て、bSam yas 寺はかつてほどの隆盛はないにしても、チベットに知れ渡った名刹であった。Atiša が訪れた当時の bSam yas 寺は Yum brtan 系統の末裔の出家者 Ha btsun Bod-hirāja 王が住持していた。Atiša はその寺の dPe dkar (Pe kar)⁸³ 院に住み、そこで Nag tsho と二人で Nī khri sna’ ba と阿闍梨 dByig gṛn (Vasubandhu 世親) が作った Theg bs dus の注釈等、多くの翻訳をしたといわれる⁸⁴。この Nī khri sna’ ba は大蔵経附属目録等⁸⁵ からわかるように、Ārya Vimuktisena の「現観莊厳論注」 [T. 3783: P. 5185] の略称である。以前、Atiša が Sol nag Thaṅ po che に滞在した時、Khu ston が大金を布施して、弥勒の『究竟一乗宝性論』、『法性分別』など多くの法が説かれた中の一つに挙げられている (NGA76a; JNY65b)。しかし、その蔵経本は訳者を Go ni mči med と rNog Blo Idan と aśe lab とするのでそれに定比できないが、後者の Thug bs dus は世親『撰大乗論釈』 [T. 4050: P. 5551] に該当、その蔵経本の奥書 (DE. 190a; PE. 232b) には bSam yas 寺の Pe kar 院で Atiša と Nag tsho が訳出したと述べるので DNG の記述と一致する。

ちなみに、Atiša は bSam yas 寺に滞在中、もともと宝物庫⁸⁶ であった dPe dkar 院の中に、Atiša の聞いたことも見たこともない、インド語で書かれた密教経典や、インドでは焼失して存在しない仏典がたくさん所蔵されているのを知って驚いたという。その仏典は Khri sroṅ lde brtsan
王がŚantarakṣitaを招いて「試みの七人」を出家させ、Padmasambhavaがチベットの巨変な神鬼を調伏して仏教の基本を定めた時代のものであるというので⁸⁷，それはbSam yas寺が創建された当時の古いものであろう。Atiśaはそれらの仏典を筆写してインドに送ったといわれる⁸⁸。

Atiśa伝（NGA，73b-74a；JNY，63b）はAtiśaがbSam yas寺に滞在中、Bodhirājaの施主によって著作や翻訳をしたと述べ，Nag tshoとの翻訳に関しても，いくつかの典籍を挙げる。しかし，蔵経目録との対照によって比定できるのは次のものしかない。

Atiśa伝に述べる典籍のうち，まずPhuṅ po lhāphī rab tu byed pa（Pañcaskandhaprakaraṇa）⁸⁹は月称（Candrakīrti）作というので，蔵経本の「五蘆論」（T. 3866；P. 5267）に該当する。その奥書には「IHa btsun pa Bodhirājaの勧奨と僧伽の要請によって，Tshaṅs pañī ḏbyuṅ gnas寺でインドの戒師Dipaṅkaraśrījñānaと大校閱翻訳師・比丘Tshul khrims rgyal baが〈亥（Phag）〉の年に翻訳・校訂して確定した」（DE，266b；PE，305b）と述べるので，Atiśa伝にいうものに相違ないであろう。この訳記にある寺名がbSam yas寺内の小院かどうか，あるいは翻訳を要請した僧伽の寺名かもと推測されるが，Bodhirājaの勧奨と記すので，AtiśaがbSam yas寺に滞在中にNag tshoと共訳したものである。また，この訳記で異例なことは訳出年を〈亥〉の年と記す点にある。この〈亥〉の年は，前述したAtiśaがbSam yas寺に到着した同じ年以外には該当するものないので，〈火のと亥〉のA.D. 1047年に相当すると考えられる。

次にAtiśa伝はlhīg rten las ḏdas pañī yag lan bekun paという訳本名も示すが，それが蔵経本の「超世間七支」（T. 2461（4486）；P. 3289（5399））という儀軌に相当すると見ると，その奥書（DE，135b；PE，170a）はAtiśaがbSam yas寺で著作したと記すのみで，訳者に関する記述はない。しかし，大蔵経附属目録部⁹⁰には訳者をAtiśaとŚākya blo grosと記すため，それが東北・北京目録に採用されている。Śākya blo grosはAtiśaの弟子で⁹¹，Atiśaとの共訳も大蔵経にくっつか存在する比丘の翻訳師である。従って，「超世間七支」がŚākya blo grosとの訳出であるならば，Nag tsho訳とするAtiśa伝とは一致しない。

—IHa saでの翻訳—

AtiśaはIHa（/Ra）saのhPhrul snaṅ寺へrNg legs paṅī šes rab⁹²（以下rNg stonと略称）によって招かれた。hPhrul snaṅ寺はネパールから誘いできたKhri btsun王妃が7世紀中ごろに建立したという古記である。以前，rNg stonは東チベットのKhamsに行ってhBrom stonやKhu ston⁹³と共にSe btsun⁹⁴のもとで学び，後にdBusに戻っていたが，hBrom stonの要請に応え，sKa（/Ka）ba Śākya dbaṅ phyug⁹⁵らdBusの有力者たちと一緒にMaṅ yulまでAtiśaを迎え行ったことからAtiśaとの縁が生まれた。Atiśa門下の一人としてrNg stonはhPhrul snaṅ寺にAtiśaを招いて歓待したので，Atiśaは一冬をIHa saで過ごした。そこに滞在中はdBus·gTsanの有力な仏教者たちも集まって来てAtiśaに請問したので，種々の法が説かれた。その時rNgが中観の法を請問したのでdBu ma rtog ge ḏbar ba（Tarkajwałā「中観思択
Nag tsho Lo tsā ba について

炎）を説いた。その大小二つのMan nag（Upadeśa）も著作してdGe bṣes rNal ḷbyor paに見るように与えたという（NGA, 80b-81a；JNY, 69b-71a）。

Atiṣa伝（NGA, 81a；JNY, 70a）はこれに関連して、Nag tshoが訳出した本の下部に記されているという、AtiṣaとNag tshoの言葉を次のように引用する。「Ra sa hPhrul snaṅ大寺で釈門の比丘rNog btsun Legs śeが請願したので、文字として記したのである」とあるのはAtiṣaの言葉で、そして「御名をMar me mdsad（＝Atiṣa）と称され、大学者の教義が備わっている方が誤った道を歩まれることはないとNag tsho Khrems rgyasは語った」とあるのはNag tshoの言葉として引用され、この引用文はAtiṣaが著作して、lHa sa hPhrul snaṅ寺でAtiṣaとNag tshoが共訳したと記す、『中観優波提舎』（T. 3929（＝4468）：P. 5324（＝5381））の奥書に多少詰句は相違するが、明らかに対応する偈文によって確認できる。

この『中観優波提舎』はAtiṣa伝に述べる、hPhrul snaṅ寺で著作した大小二つのMan nagの一つであることは間違いいないだろう。しかしあ一のMan nagを『開宝籤』（T. 3930：P. 5325）に比定するのは疑問である。なぜなら、『開宝籤』の奥書（DE. 116b：PE. 132a-b）に、要約すれば、次のように記すからだ。すなわち、『開宝籤』はTshul khrims rgyal ba（＝Nag tsho）が勧めたので、Vikramaśīlaという大寺院において、尊師の説かれたとおりにMar me mdsad dpal ye śes（＝Atiṣa）が記したと述べ、続いて訳記にはDīpaṃkaraśīrijñānaと翻訳師のrGya brTson ṭag pa tShul khrims rgyal baとが翻訳したと述べる。この奥書に従えば、『開宝籤』の著作はVikramaśīla寺でなされ、しかも訳者の一人にAtiṣaらの一行とチベットへ向かう途中にネパールで死んだというわたるrGyaも加わっているため、少なくともチベットでの訳出は否定される。おそらくインドで翻訳されたものであろう。

Atiṣaは『思挍義』（T. 3856：P. 5256）を以前、Nag tshoが招請使としてインドにいたころのSomapuri寺で説法し、それを聴聞したNag tshoは後に『八十問』の中でその当時のことを説いている。そして、AtiṣaがrNog stonの請願によってhPhrul snaṅ寺でも『思挍義』を説いたことはAtiṣa伝から知られるが、その翻訳もrNog stonの依頼でAtiṣaとNag tshoが行なったことが史書に述べられている。そのことは慧厳法の奥書（DE. 329b：PE. 380a）にhPhrul snaṅ寺でAtiṣaとNag tshoによって訳出されたと述べることと一致する。

また、『思挍義』の一部（DE. 148a-155b：PE. 161a-169a）と本文が同じである、Bhavyaの『異部分派解説』（T. 4139：P. 5640）もその奥書（DE. 154b：PE. 187b）によれば、hPhrul snaṅ寺でAtiṣaとNag tshoが訳出したと述べる。本来、『異部分派解説』が『思挍義』から独立して存在した典籍であるかどうか疑われているが、両典が同じ訳処と訳者を記することは、それを首肯させるものである。

『思挍義』は『中観心論』（T. 3855：P. 5255）の注釈書で、その著者は両方ともその奥書にBhavyaとさせるが、『中観心論』も奥書（DE. 40b：PE. 43b）にhPhrul snaṅ寺でAtiṣaとNag tshoによって訳出されたと記す。その点はKCS(59b-60a)に、『中観心論』と『思挍義』はrNog
の施主によって Atiśa と Nag tsho が訳出したということと一致する。以上のように、IHa sa での Atiśa と Nag tsho の訳出は Bhavaya の中親関係の典籍が特徴的に見られる。

IHa sa での翻訳は、他にも Atiśa 伝（NGA, 81a; JNY, 70a）に、rNog ston が律を要請したので、dGe sloh daṅ poּj lo dri ba と dGe tshul daṅ poּj lo dri ba の二つを翻訳した、と述べる。この二典の前者は蔵経本の『比丘初夏問』(Bhikṣuvarṣaṅgrāpačchā) [T. 4133: P. 5649]の奥書にIHa saのHod mchog dnos grub 寺で Atiśa と Nag tsho が訳出したと記するので、これに相当するであろう。また後者は同じ題目的『沙弥初夏問』(Śramaṇeravarsaṅgračchā) [T. 4132: P. 5634]が蔵経本にあるが、奥書（DE. 66a: PE. 80a）は訳者をカンミールの戒師 Narasadeva と翻訳師 gGyal baṅ ŋes rab とする。従って、Nag tsho らの訳本とは別のものである。

こうした中親、律などの翻訳は rNog ston の要請と施主によって行われたものである。rNog ston は後に Atiśa の言に基づいて、gSaṅ phu の sNe thu thog に寺を建立し(A.D. 1073), その寺は甥の rNog Blo Ildan ŋes rab (1059–1109) が親を継いで顕教の学問寺として発展するが, rNog ston の学問的な素地の一端はこの IHa sa 時期に形成されたと考えられる。

－sNe thān での翻訳－

Atiśa は IHa sa の南西方向に約 25 km 離れた sNe thān に、Baṅ ston Byaṅ chub rgyal mtshan の招待で行き、その後何度か出入りはあったが、結局、最後はこの地で Atiśa は生涯を終えた。sNe thān に行くきっかけは、ḥBrom ston が Baṅ ston に対して、「あなたの sNe thān の土地柄は良くって暖かいので、Atiśa を招きたい」という勧めに Baṅ ston が応じて実現した（NGA, 75b; KCS, 79a）。その背景には ḡBrom ston と Khu ston との確執があった。Baṅ ston を含めたこの三人は、前述した Se btsun の同門という関係であるが、ḥBrom ston と Khu ston の関係はお互いをライバル視してそれほど良好でなかった。それが端的に現れたのは、ḥBrom ston が Atiśa を dBus 地方に招請するための協力を要請した手紙の中に、当時 dBus 仏教界の有力者であった Khu ston の名前を書かなかったことである。そのことで、Khu ston が怒って ḡBrom ston を誅り、以後、両者は Atiśa の巡錫をめぐってお互いにつばき合いを演じている。

例えば、Khu ston が Yar kleṅs に Atiśa を招くと、ḥBrom ston が Baṅ ston に、Khu ston はとても嬉慢であるから、Atiśa を心から奉仕することができるかどうかわからないと相談して、Khu ston の Sol nag Thān po che から Atiśa を去らせようと策を講じる。今度はそれを察知した Khu ston が Atiśa を引き止めようと必死になるといった具合である（NGA, 75b–78a; JNY, 65b–67a）。こうした ḡBrom ston と Khu ston の駆け引きのもとに、Atiśa は sNe thān に迎えられた。

Atiśa が sNe thān に滞在した総年数は 6 年（KCS, 50b）とか、8～9 年（JNY, 84a）とわれて一定しないが、チベットにおいては最も長い年数をそこで過ごしている。その間、チベットの dBus, gTsaṅ, Khams の各地から多くの人が sNe thān の Atiśa ののもとに参集して法の諸問を
した。主な人物を挙げれば、Ｂｒｏｍｓｔｏｎ、ｈＮｇｏｓｔｏｎ、ｓＫａｂａ、Ｓｈａｋｙａ、ｄＢｒａｈｍ、ｄＧｅｂａ、
Ｇａｒｍｉ、Ｙｏｎｔａｇ、ｙｏｎ、Ｇｒｕｎ、ＡｈＮｅｂｒａｈｍ、ｃｈｕｂ、ｂｕｙ、Ｇｎａｃｓ、Ｐｈｙａｇ（／Ｃｈａｇｒ）、Ｋｈｒｉ、ｈＣｈｏｇ、
らがいる（ＮＧＡ、９２ｂ、ＪＹＮ、７９ｂ、ＫＣＳ、６０ｂ）。Ａｔｉｓｈはこれらの聴聞者に、作タントラ（Ｂｙａ、ｂａｌｊｉ、
ｒｇｙｕｄ）関係の種々の成就法や儀軌を説法し、それらはＮａｇ、ｔｓｈｏやＢｒｏｍｓ、ｓｔｏｎらが訳出したた
ことがＡｔｉｓｈ伝から知られるが、蔵経本に確実に比定できるものはない。
またその中で、Ａｔｉｓｈの作ったＳｅｍｓｂｒｓきｙｅｄ、ｐａｌｊｉ、ｃｈｏｇ（「発心儀軌」と徳光（Ｇｕｊｐｒａｂｈｅ）
作のＴｓｈｕｌ、ｋｈｒｉ、ｓｈｕ、ｂａｌｊｉ、ｆａ（「戒品注」）をＡｔｉｓｈと、Ｎａｇ、ｔｓｈｏが翻訳したと述べる（ＮＧＡ、
９２ｂ、ＪＹＮ、７９ｂ、ＫＣＳ、６０ｂ）。この「発心儀軌」に類似する題目は蔵経本「Ｄ．３９６９（＝１４９０）：Ｐ．
５３６４（＝１５４０３）」に見られるが、その奥書はＡｔｉｓｈが、ｄＧｅｂ、ｂａｌｊｉ、ｂｌｏ、ｇｒｏｓと、新たに、パ・Ｎａｈ、ｒｉｓの
翻訳師、ｒＭａ、ｄＧｅｂ、ｂａｌｊｉ、ｂｌｏ、ｇｒｏｓと、彼は「菩提道灯」を訳出したり、法称の「量
評価」（Ｔ．４２１０：Ｐ．５７０９）とその自注（Ｔ．４２１６：Ｐ．５７１７（ａ））に書き、Ｄｅｖｅｎｄｒａｂｕｄｄｈｉの注釈（Ｔ．
４２１７：Ｐ．５７１７（ｂ））と、Ｓｈａｋｙｏｍｉのその復注（Ｔ．４２２０：Ｐ．５７１８）等の因明関係の訳出もしている。
それによって、Ｍａ、ｒｉｓから、チベット中央地方へ因明の訳出が広がって、その系譜は後の、ｒＮｇｏ、
Ｂｌｏ、ｌｄａｎ、ｓｈｅ、ｒａｂの翻訳に基づく「新因明派（Ｔｓｈａｄ、ｍａ、ｇｓａｒ、ｍａ）」に対して、「旧因明派（Ｔｓｈａｄ、
ｍａ、ｒｈｉｕ、ｍａ）」と呼ばれた。その、ｒＭａが「発心儀軌」の翻訳をしたり、更に、法称の記事が正しい
とすれば、それはおそらく、Ａｔｉｓｈが、Ｍａ、ｒｉｓ、滞在中のことで、Ａｔｉｓｈ伝にいう、Ｎａｇ、ｔｓｈｏとの翻
訳とは、奥書にいうところの校訂を、ｓＮｅ、ｔｈａｎで行なかったのではないかと考えられる。
次に、「戒品注」は、『瑜伽師地論・菩薩地』の第十「戒品」の注釈を意味し、蔵経本では「菩
薩地」（Ｔ．４０３７：Ｐ．５５３８）に対する徳光の注釈は、第一「種姓品」から第九「施品」までの注釈
（Ｔ．４０４４：Ｐ．５５４５）と第十「戒品」（Ｔ．４０４５：Ｐ．５５４６）とに分かれて分類されている。その理
由は前者がＡｔｉｓｈと、Ｎａｇ、ｔｓｈｏの共訳で、後者が、Ｐｒａｊｎａｒｍａｎや、Ｙｅ、ｓｈｅ、ｓｄｅの共訳した９世
紀前半ごろの旧訳という訳者の相違によって、訳本が別々に伝承されたことが考えられる。蔵経本
の「戒品注」は間違いなく旧訳であることが考察されているので、ｓＮｅ、ｔｈａｎで、Ａｔｉｓｈと、Ｎａｇ、
ｔｓｈｏが共訳した「戒品注」は、何らかの理由で大蔵経に入れられず、旧訳の方が採用されたこと
になるであろう。Ａｔｉｓｈ伝は、ｓＮｅ、ｔｈａｎで、「戒品注」の訳出しか述べていないが、蔵経本に収められ
た「施品」とそれに対応する注釈が、それに並行するようである。Ａｔｉｓｈは、Ａ．Ｄ．１０５４の（本のえ年）に
ｓＮｅ、ｔｈａｎで亡くなったという。Ｎａｇ、ｔｓｈｏは、Ａｔｉｓｈの亡くなる前に、長年にわたって師事したＡｔｉｓｈのもとを離れ、Ｊｈａｎａｋａｒａに師
事するためにネパールへ行き，Atiśa の最後に立ち会っていない。従って，Nag tsho と Atiśa との訳業はすべて A.D. 1053年以前のものといえるであろう。

以上，Nag tshoの前期の訳業を検討した。これに続いて後期の訳業を見る予定であるが，紙数の都合で以下は別稿に譲る。

＜注＞

1 Atiśa に関するチベット文献の資料およびその研究はEimer 1977 に詳しい。また，チベット文献を駆使して Atiśa の全体像を解明した羽田佳男博士の一連の Atiśa 研究は有用である。
2 通称は（dGe bṣes）Zul phu ba（chen po）という。DNK，kha. 8b-9a によれば，Roṅ pa Phyag sor ba の弟子 Bya bḥul ḍbsdin はgTsāṅ地方 Roṅ g-yuṅ で〈金の百〉の年（A.D.1091）に生まれた。ḥBre chen poから出家し，法名はbrTson ḍgrus ḩbar と付けられた。Sog，rGya ḍbsdin，rMa tsho らから律を聴聞して部薬になった。また別の師からも中觀，因明，論語，カーダマ法などを学んだ。後に，Zul phuに講法堂（b Śad graw）を創設した。76歳の時，Zul phuの寢室で亡くなったという。Bya の生没年は，KCS にBya ḍbsdin はgTsāṅ の Roṅ g-yuṅ で父 Bya rGyal ba ḩbar の三子の中の子として〈金の百〉の年（1100）に生まれた（KCS，337b）と生年を述べ，没年は75歳の〈木のえ午〉の年（1174）にZul phuの寢室で示寂した（KCS，338a）と述べる。ちなみに，RMB，3a；PRM，p.11 は生年をDNG と同じ1091年とする。
3 NGA の研究として，Eimer 1979a はNGA およびそれと密接に関係にあるJNY に関して，テキストとその内容を分析し，NGA とJNY の相互関係等を論じた研究に加えて，NGA の抄訳と固有名詞索引から成り，Eimer 1979b はNGA のテキストをJNY と対照した検証ローマ文字テキストで，その異同の注記とDNG，KCS，KRN 等の参照を付記している。
4 NGA，96a，103a；JNY，83a，91a によれば，Nag tshoの「八十論」の成書出来は次のようである。Atiśa は生前 Nag tshoに対して，私の姿を描き，兜那天から私を招請して善住を立派に為せと言い渡していた。そこでNag tshoはAtiśaの死後，インド人の画師に依頼してAtiśaの肖像を中心として，囲囲にAtiśaの守護神と弟子たちの像などを一枚の絵布に描かせた。その裏面にNag tsho自身がAtiśaを礼讃する八十論の掲示を書いて著述行為を行なったという。この「八十論」はNGA，JNY，KCS 等，多くの史書類に部分的に引用されているのが，後にSaṅ ṇiḥ po の作った掲示が「八十論」に混入され，さらに偈歌が増えて，その全文をLKD，15b-20a に収載されている。「八十論」に関してはEimer 1977，pp.142-145，305-325；Eimer 1983，pp.1-8；Eimer 1989，pp.21-38 を参照。
5 Roṅ pa がNag tshoのことを訪れってAtiśaのことを問うるまでの経緯は，NGA，106b-107a；JNY，94a-b；DNK，ca.35b-36a；KCS，363a-b；KRN，81b-82b を参照。その要旨は次のようである。Roṅ paはbRum ston を始めとするAtiśaの直弟子七人（八人とするのはNag tsho も含めた数）と孫弟子二人にAtiśaの来歴と成就の教誨を訊ねたところ，直弟子たちの言うこととは一致していたが，孫弟子たちの言うことは一致しなかった。そこでRoṅ pa は直弟子一人のNag tshoに会う必要があると考え，Guṅ thang のYaṅ thog 寺にNag tshoを訪れた。結局，Roṅ pa はNag tshoのもとで3年ほど師事した間に，彼からAtiśaの教誨やAtiśaがどのようなにしてチベットに招かれ巡録したのを聞き得ることができたという。
6 Roṅ pa がNag tshoから聴聞したことは，元はrVaṅ tso Byaṅ chub rdo rje の随筆者，後にRoṅ pa の四大弟子と呼ばれる者たちによってそれぞれ記録が作成されたが，その一人Bya bḥul ḍbsdin はそれをまとめてAtiśaの詳細な伝記を編纂したという（cf. NGA，107b-108a；JNY，94b-95a）。
7 JNY はsNar thāṃ 寺第七代管長のmChims Nam mkhaṅ grags（?-1285/1288/1289）の編纂。
NGA と JNY の関係は Eimer 1977, pp. 192-213 に詳しく考察されている。

9 DNG, kha. 12a, ca. 3b; KCS, 67b; KSN, 5b; RMA, 11b; PSJ, p. 368; PRM, p. 6.
10 Man yul は mNyab ris smad から gTsahn の La stod にまたがる地域で、ネパールと国境を接し、その中心地は sKyid grol である。
11 Gu na tham は Man yul 地方の rDo sn kha を中心とする地域である（cf. Ferrari, 1958, p. 154, n. 548）。
12 YJC, p. 91 に ‘Gu na tham IHas can gdo’n ba Nag tsho tshul khrms rgyal ba’ と述べ、また IHa can gdo’n/IHas gdo’n (NGA, 47b/JNY, 39b) に Nag tsho の親族が住んでいるという記述に掲げて生地と見なした。
13 Cf. NGA, 46b; JNY, 38b; KGT, da. p. 291.
14 Nyab (/mya) chu という、rGyal rtse を通過し gShis ka rtse を経て gTsahn po（/Yar gtsaṅ po/Yar klu‘s gtsaṅ po）河に注ぐ川の上流地域 Nyab (/mya) stod に sTag tshal があり、その地方の Phum bu ri rgya stod/Phum bu ri （CMB, 50a=Khum bu）が rGya の生地で、学問は sTag tshal で学んだという（cf. MTL, pp. 113-115,120）。
15 Vikramaśāla 寺は今日の Bihar 州、Bhagalpur 地方、Patharghata 附近の Antichak 村にあったという（cf. Chaudhary 1975, pp. 2-3）。
16 NGA, 46b; JNY, 38b.
17 NGA, 58b; JNY, 49a; この点に関しては羽田野 1960 に詳しい。
18 NGA, 37b; JNY, 25b.
19 Cf. NGA, 39b; DNG, ca. 2b.
20 次のような用例がある。「IHa bla ma Khu dbon’ (NGA, 51a; JNY, 41b, 42a; KCS, 46a), ‘mNyab ris kyi rgyal po IHa bla ma Khu dbon’ (NGA, 65b; JNY, 54b), ‘Ye śes pod klu dbon’ (PSJ, p. 360).
21 Cf. Tucci, 1956, pp. 51-60.
22 RZN, 19b; DNG, kha. 3b; KCS, 66a.
23 NGA, 48a-49a; JNY, 39b-40b; KCS, 44b-45a.
24 当時の寺院の一端は Nag tsho「八十譜」（NGA, 40b; KCS, 41a; KRN, 25a; LKD, 16a-b）に、’o tan ta yi pu ri na || rab tu byun ba bṛgya phrag phyed daṅ gsum || bi ka ma ni śi la na || rab byun bṛgya phrag ma loḥ tsam ||’ (NGA, 40b)「Odantapuri には出家者が53 人、Vikramaśīla には出家者が100 人ばかりいる」と詠まれている。
25 Cf. NGA, 55a; JNY, 45b.
26 KRN, 33b は Atiśā が 57 歳の〈賓〉の年にインドから出立したと述べ、異説として 59 歳〈金のえ辰〉の年の出立、61 歳の年の出立という（チベット人による）主張があることを紹介する。
27 RMB, 1 の「1037 年〈火のと丑〉の項に「bsTod pa（譜）によれば、Jo bo (=Atiśā) が〈チベット〉行かれたと述べる」とある。この「bsTod pa」は Nag tsho の「八十譜」ではなく、別人の作であるが、明らかではない。
28 Cf. NGA, 97a, 107a; DNG, ca. 9b.
29 羽田野 1966 は DNG などに述べられる Atiśā の年代設定に対して、異説の可能性を考察しているが、当面は DNG, kha.5a, ca.3b, ba.11a-b の説に従う。
30 JNY, 39b に NGA, 48a と同様の内容が見られるが、rGya が譜録に携わったとは述べない。これに対して、KCS, 59b は Vikramaśīla 寺で「入二譜」とその注釈、『心頌編集』とその Saḥṣīḥ po 作の注釈、『中觀寶鬘』等は Atiśā と rGya の2人によって最初に譜録されたと述べて、Nag tsho の名を挙げない。
31 KCS, 64b によれば、バンディタ Saḥṣīḥ po は以前、Atiśā の友人であった。秘密真言に関しして内外の区別をするのが困難であったのを Atiśā が善巧に区別して説かれたので、Saḥṣīḥ po
はAtišaを信奉して後に弟子になったといわれる。またKCS, 35bによれば、Atiša自身が、内外の区別に精通する者は師gSer gliṅ pa とŠānti pa と私（Atiša）と私の弟子のSališāṅī po の四人にしかいないと語った、という。ここでいう秘密真言の内外の区別とは、密教聖典の教判として階級別に分類することを意味し、その場合、内外の内は瑜伽階級以上を指すであろう。Atiša自身は「菩提道灯照論語」[T. 3948] (DE, 287a-b)から知られるように、七分類を採用したが、後のBu stonの四分類が一般的になった（cf. NGA, 14b-15b; JNY, 11b-12b)。

NGA, 48aのテキストは、「lo tshits ba che chuṅ ghyis kyi bsgyur」（「大・小二人の翻訳師が訳した」）であるが、その箇字注に「che」を「rGya」、「chuṅ」を「Nag tsho」と記すことに従った。

Atiša伝（NGA, 26a; JNY, 5b）はSomapuriでAtišaの誦った歌をrGyaとNag tshoが文字にして、それをAtišaとNag tshoが翻訳したという。これは器経本に比定できないが、例えば『Dipaṃkaraśrījānaの法歌』[T. 2374: P. 3292]のような類を指すのかもしれない。

テキストは「go ga tsar ya daṅ | deṣi pi dhar ta’ (NGA, 48a), 'yo ga tsarya daṅ | deṣi pi na tar ta' (JNY, 39b) とあるが、比定できない。

東北日錄[T. 3949]の翻訳者別項のde brtseは同書奥書（DE, 293b）、附属目録部（DE, 441a）によればde brtseの誤記（P. 5345）の奥書（PE, 340a）とTKA, 93bはde brtseとする。しかしCBC, 163bはTshul khrims Ḇy敦 gnasとしてde rtseを欠く。また、Atiša小部集[T. 4469: P. 5382]の奥書（DE, 8a: PE, 10a）にはTshul khrims Ḇy敦 gnas shi ba とある。Atišaと関係ある人物でこの名前に類似するのは、例えばDNG, ca. 10bに列挙された弟子の中にTshul khrims Ḇy敦 gnas がいるが、この者の素性は知られない。

NGA, 10bによれば、間浮徳（Jambudvipa）の近くの、種々の宝石を有する島であるからgSer gliṅと称する、という。Suvanadvipaはスマトラに比定されている（羽田野1960, p. 156)。

gSer gliṅ pachos kyi grags pa（Dharmakirti）についてはAtiša伝（NGA, 10b-13a, 28b-30b；JNY, 20b-24a）に詳しい。gSer gliṅ paはAtišaに対して包容の門を開き、修心（Blo sbyon）の次第を授けた師で（NGA, 10b；JNY, 20a）。AtišaはSuvanadvipaで12年ほど在職した（NGA, 30b；JNY, 23b)。

江島1983, pp. 381, 385（注21）を参照。

異説はRMB, 1の‘1038年〈土のえ寅〉の項に「読（bsTod pa）」によれば、（Atišaが）ネパーに到着」とある。

テキストはNeyapāla（NGA, 56b), Nayapāla (JNY, 47a)とあるが、刻文（Bhattacharya 1996, p. 322), 写本（Bendall 1883, p. 175: Add, 1688)のNayapālaを採用する。チベット語表記の異字は他にも、次の例のように種々見られる。Niryāpāla（KGT, da, p. 324), Niryaphaḥa（T. 4188 DE, 71b), Niryāpāla（KGT, da, pp. 291, 296), Nairyāpāla（KCS, 38b, 39a, 55b), Nairyaphaḥa（LKD, 19a), Nairyaphaḥa（LKD, 21a)。


Bhattacharya 1996, p. 316; Bendall 1883, p. 175: Add, 1688. 「無垢宝書翰」によれば、NayapālaはMahāghatiに生まれ、仏教を広めて、国政を仏法に基づいて守ったと述べる（cf. T. 4188 DE, 70a)。


NGA, 36b; JNY, 32b; KCS, 39a（以下の仏文テキストはNGAに掲る。カッコ内の異字はJNY) 

dGe bses Lo tsa ba Ḇy敦 bstot pa naṣ | 
dGe bses Lo tsa ba (= Nag tsho) の讃の中に,
rgyal po ne ya pā la daṅ || nub phyogs ka rṇaṇi(/rṇaṇi) rgyal po gḥis ||
Neyapāla 王と西方 Karṇa の王との二人の間に
rtsod pa chen po byuṅ bālī tshē || nub phyogs ka rṇaṇi(/rṇaṇi) rgyal po yis ||
大論争が起こった時、西方 Karṇa の王
ma ga dhar ni dmag draṅs pas || groṅ khyer ma thub gnas gshir draṅs ||
Magadha に軍隊を率いたので、都城は耐えきれず、住居地に（軍隊が）率いられた。
rab byuṅ dge bsten lha yāḥ bsad || yo byad maḥ po gnaḥ/(gnaḥs) du/(su) khyer ||
出家者や優婆塞を五人も殺し、多くの物資を略奪した。
khyod la she sdaṅ mi mṅaḥ bas || ko loṅ ma(/mi) mdsāḥ sūṅj rje lkhrūṅs ||
あなた（＝Atiṣa）には憎むことが無いので、怒ることをささらじ、悲心が生じた。
g-yul bzlog/(log) tshē na dmag mi bskyabs || phyi nas bla mas sūṃs/(sūṃ) mdsāḥ de ||
敵軍を撃退するために兵士を護った。後に師（＝Atiṣa）が和解をささらじて、
ḥṣho bālī yo byad ma ggtogs pāj || yo byad lhag ma med par btaṅ ||
生活の物資を除いた物を残らず手放した。
lus daṅ srog la ma gzigs par || chu bo chen po yāḥ yāḥ brγal ||
（Atiṣa は）身体と生命を顧みず、大河を何度も渡った。
de gḥis bzlum/(sūṃ) nas mdsāḥ bor mdsād ||
その二人を和睦させて親友になった、
ces gsaṅs so ||
と述べられている。

46 Neyapāla をマガダの王と呼ぶのは、「八十論」の ma gha dha yi bdag po ni || rgyal po nai rya pā la yin || (KCS, 55b; LKD, 19b-20a) に基づく。Dietz 1984, p. 303, n. 2 は「無垢宝書翰」にNeyapāla の生地をMahāghati とあるのがMagadha と混同されたという。

47 注 45 に示した「八十論」の ‘ka rṇaṇi rgyal po’ という語句は、それに基づく ‘ma ga dhaṅ rgyal po ne ya pā la daṅ || nub phyogs ka rṇaṇi nu sṛṣṭi kyi rgyal po gḥis’ (NGA, 36a; JNY, 32a-b) という表現を見れば、王名ではなく、國名もしくは王朝名として Atiṣa 伝に述べられていることがわかる。これに対して、インドの研究者は Majumdar 1943, p. 180 ‘the Kalachuri king Karṇa’ とか Sircar 1977, p. 965, ‘this Karṇa is undoubtedly the Kalacuri king who ruled in 1040-71 A.D.’ と述べ、王名と見なしている。Kalacuri 王国の首都は Tripuri で、現在の Jalalpur 附近の Tewar である（cf. Sircar 1971, pp. 333-334）。

48 NGA, 57a; JNY, 27a, 47a. Thaṅ bviḥāra は今日のカトマンドゥの Thanb Bahi に比定される（cf. Locke 1989, p. 100）。


50 Eimer 1979a, pp. 466-467 は sTod lngrel を蔵経本に比定（TT, Nr. 2045 は Nr. 2049 の誤記）する推論を述べるが、誤りである。

51 テキストは ‘Boḍ’ であるが、この場合は Maṅ yul との対比でチベット中央地方の dBus・gTsaṅ を意味すると解釈した。

52 NBJ, 75a によれば、Saṅs rgyas shi ba は Udyāna の成師（mKhan po）Nor bu ghiṅ pa bDe bālī rdo rje の弟子とするが、異説として両者は密号と本名の違いによる同一人物と、Sraddhäuservarman の弟子とする説も示す。

53 KRN, KCS のテキストは ‘jo bo daṅ lo tsā bas bsgyur’ とあるが、この lo tsā ba は Legs paṅ
ses rab ではなく Nag tsho を指す。

KRN, KCS, CMB は『前半の注釈』の単独訳と Eyañ chub ḫod の盛み書きの件に触れならない。

CMB の作者 Naṅ ral Ni ma Ḫod zer の生没年は A.D. 1124-1192 または 1136-1204 の二説がある（cf. CMB, Meisezahl, Verbemerkungen, p. 9。)

CMB, 502b に Rin chen bzaṅ po の語はないが、文脈から見て Rin chen bzaṅ po である。

Na ma (CMB, 502b), Nā ma は CMB, 500b, KZN, 19b によれば、Ye ses Ḫod が Mar yul 地方に建てた寺である。

CMB はテキスト全体に繰り字の誤記、脱落等が多く見られ、例えば、Buddhaśrīśānti は bhu ta śi šān ti ba と表記されているが、訂正して示す。他の事例も同様にして、個々の注記は省略する。

この訳経に関連する記述が Atiṣa 伝 (NGA, 57a; JNY, 47b) に、その後、パンディタ Buddhaśrīśānti と Kamalagupta (Kamakuta = NGA, JNY) が Mar (／Maṅ) yul sum mo に招かれ、根本から翻訳し直して確定した、とあるが、Rin chen bzaṅ po の名は示されない。

DNG, ja, 2b; TKA, 54b に拠る。従って、「前半の注釈」とは「真正智経」の第二「降三世品」以降の注釈を意味するであろう。

cf. NBJ, 72b, 74a-b, 75a, 77b, 85a。

Thugs rje chen po については、川越 1993, pp. 463-465 を参照。

Zaṅs dkar bṛhāg sa Ḫes rab は mPhaṅ rnis の Zaṅs dkar に生まれ、Lo chuṅ Legs paṅ Ḫes rab、カシミールの Jñānaśrībhadra、Kha che dGon pa ba らに師事した。rTse lde 王が 1076 年に催した「丙辰の法輪」にも参加している。

[T. 4569: P. vol. 151] (DE. 395b: PE. 58b)

この記述は TKA, 54b に従うものだが、これに拠る限り Buddhaśānti の名前が示されないため、『前半の注釈』すなわち「金剛界品」の注釈部分は Rin chen bzaṅ po の単独訳と誤解されるおそれがある。

羽田野 1959, p. 44。

羽田野 1959, p. 29 を参照。Eimer 1979a, p. 334 は該案本に比定しない。

DE. 221b の ‘Maṅ yul gyi groṅ’ に従ったが、PE. 439b は ‘Maṅ yul gyi Kyi groṅ’ あり、Kyi groṅ を sKyid groṅ の異字と見ることもできる。

[T. 3947: P. 5343] の著述 (DE. 241a: PE. 277b) を参照。

cf. NGA, 62b; JNY, 52b; DNG, ca. 4a; KCS, 57a, 68a-b。

NGA, 63a は ‘dgrg bṛhā la tsā ba dṇa lma gni kyis bsgyur ro’ と述べ、Nag tsho と Atiṣa の共訳であることを見事に示すが、他に JNY, 53a は NGA の下線部分を記述しないので、直前に述べる翻訳論 dGe baḥi blo gros を指す可能性もあり、あいまいな記述である。

cf. DNG, ca. 5a; KCS, 68b。

[T. 4569: P. vol. 151] (DE. 374b: PE. 41b.) cf. TKA, 37a。

Atiṣa 伝は mPhaṅ rnis に 3 年という数字を明示しているわけではないが、NGA, 57b, 63a, 69b から解釈されるように、Pu raṅs に 1 年と行き帰りの Maṅ yul での各 1 年とを合算して mPhaṅ rnis での 3 年と理解できる（羽田野 1966, p. 446 を参照。

Atiṣa 伝は Pu raṅs (NGA, 62a; JNY, 53a) とする。

mPhaṅ rnis は sTod (上), Bar (中), sMad (下) に区分する場合、Maṅ yul は mPhaṅ rnis smad に含まれる。

この点は Nag tsho が、Atiṣa はチベットに 1 年以上滞在することはないと語ったことからも推測できる（cf. NGA, 63b; JNY, 52a; 羽田野 1966, p. 446, n. 10。

KCS, 66b, 415a は〈水の水午〉の年に Atiṣa はチベットに到着、また PSJ, p. 364 は〈水午〉にチベットの mPhaṅ rnis, Maṅ yul, Guṅ tshag, Tho lhun に到着、という表現をする。異説は RMB, 1; PRM, p. 7 に、〈土の卵〉(1039) の年に「讃」と「Lam rim」によれば、Jo bo は mPhaṅ rnis に到着」とある。
名はrgyal ba'i phyuṅ gnas (1004/5-1064)。th.cmb stonについてはKCS, 84a-105a，羽田野1965a, pp. 411-415を参照。

JNY, 63aはAtiṣaのbsam yas寺創建は〈亥〉の年という説を，それが引用文であること示唆する 'ces phyuṅ ste'the-（別なものに）出ている」という語句を挿入して示す。しかし，JNYの著者（mChims）の解釈は本来'Lug'をあたった原文が示されている，'Phag'に誤ってしまったと述べて，その説を採らない。

羽田野1966, pp. 447, 450を参照。

DNG, kha. 13bは'sNa nam rDo rje dba'phug が57歳の〈木のえ年〉の年にJo bo rje (= Atiṣa)はmNaḥ risに到着した。そしてsNa nam72歳の〈火のと亥〉の年にbsam yasに来たというわれ」と述べる。sNa namの生年は〈火のえ年〉の年といわれる（DNG, kha. 11b; RMA, 11a; PRM, p. 6），それはA.D. 976年に換算できるので，この〈火のと亥〉は1047年に相当する。〈火のと亥〉説はKCS, 415a; KGT, da, p. 304; RMB, 2a等に見られる。異説として羽田野1966, pp. 456-458は問題の〈亥〉の年をNGA (75bが典拠であろう)とmKhas grub rje（cf. T. 5463 A, 22b）に基づいて〈木のと亥〉の1035年とする。この〈木のと亥〉説はKSN, 4a; PSJ, p. 367にても見られる。

ここではbsam yas寺の護法神を意味する。Tucci 1950, p. 56はPe har/dPe dkar/dPe har が本来，Vihāra（寺院）に対応する神であるというLauberの見解を正しいと認め，寺院を意味するその神がChos skyoṅ（護法神）に転化したのは，寺院を守護する神として寺院が擬人化されたからだという。

DNG, ca. 8a-b. DNG, ca. 4bによれば，AtiṣaがmNaḥ risのGu geに滞在していた時，Rin chen bzaṅ poがAtiṣaにbrGyad stod pa（T. 12: P. 734），Nhı khrī snaṅ ba, brGyad stod hgyrel chen（T. 3791: P. 5189）等，以前に翻訳された多くのものを校正するよう願ったと述べる。この点はKCS, 59bにも同様な趣旨が見られ，実際，Nhı khrī snaṅ baを除く二典はAtiṣaとRin chen bzaṅ poが校正したことが裏書から知られる。Nhı khrī snaṅ baに関しては，蔵経本でそれを確認できないが，いずれにしても，Nag tshoやrNyog Blo ldan šes rabの翻訳以前に別の訳本があったかかもしれない。


CBC, 127bに'dkor mdsod pe har gliṅ du nor lhog'（宝物庫Pe har院に財宝を奉安した）と述べることから，この院がbsam yas寺の創建当初から宝物庫の役割を有していたことが知られる。その院の宝物庫の北側にAtiṣaの小さな寝室があったという（cf. NGA, 73b; JNY, 63b）。

KRN, 25b, Atiṣa伝（NGA, 16a; JNY, 13b）はPādmasanabhavaがbsam yas寺に将来したという（cf.CMB, 332a）。

NGA, 16a, 78a; JNY, 13b, 67b.

KCS, 59bはbsam yasでdBu ma phuṅ po lha pa（五薬論）等，多くの方法を訳出したという。


Cf. DNG, ca. 10b.

rNyog stonについてはKCS, 75a-76a，羽田野1956, pp. 8-9を参照。

名はbrTson lugs g-yun druṅ（A.D. 1011-1075）。

名はdBaṅ phug gshon nu（NGA, 64a）またはByaṅ chub gshon nu（JNY, 53b）Se btsunについては羽田野1956, p. 13を参照。

sKa baについてはKCS, 81bを参照。

NGA, 81a，ra sa lḥrul snāṅ gtsug lag khaṅ chen du || ša kyaṅ le dge sloṅ rhog btsun legs še yis || gsol ba btab nas yi ger bkoṅ pa yin || shes bya ba de jo boṅi gshul yin || mthshan ni mar me mdsad ces grags pa yi || mthcas pa chen poṅi gshul lungs su lḥsins pa || gol baṅi lam du mi lḥgro shes || nag tsho tshul khrsims rgyal za smra || bya ba yod pa de lo tsā baṅi gshul yin gshul ||’

[T. 3929] (DE. 96a)の訳記のみは訳者名をNag tshoしか挙げない。
この俳文は重複する Atiśa 小部集の版には見られない。

98 『T. 3929』 (DE. 96a) 「ra sa lphrul snañ gtsug lag khañ chen du || mar me mdsad dpal shes byañi mkhas pa la || bod kyi r¡ñog bsun legs sañi ñes rab kyiñ || gsal ba btab nas bdag giñ bsgyur ba yin || gnas brtan mar me mdsad dpal gyis || gshunñ lugs skyes bu gsum ñðsin pa || grol bañi lam du mi ñèro shes || nag tsho tshul khriñs rgyal bas smras || *。なお、この俳文は重複する Atiśa 小部集の版には見られない。

99 羽田野 1965b, p. 167 は『開宝頌』を述べる。

100 NGA, 69a-b; JNY, 59a; KCS, 47b; LKD, 17b-18a.

101 Atiśa 伝 (NGA, 81a; JNY, 70a) は『思挍伝』を翻訳したとまでは述べない。しかし、DNG, ca. 9a, ca. 31b によれば、IHa sa 滯在中に Atiśa と Nag tsho との翻訳を示す解釈できるし、KCS, 59b-60a も同様に、IHa sa で『思挍伝』が Atiśa と Nag tsho によって翻訳されたと述べる。

102 江島 1980, p. 10 を参照。

103 Bhavya の呼称とその著作の問題は江島 1990 に論じられている。それによれば、6 世紀の Bhāviveka が『中観心論』とその注釈『思挍伝』を著し、それは『デンカルマ目録』で翻訳中の書物に挙げられているものに相当する。そして 1 世紀に Atiśa が、Bhavya の手になる新しい『思挍伝』を語ってしてチベット語に訳したものという（江島 1990, p. 840）。

104 この著者名は奥書や目録に記されないが、DNG, ka. 16b によれば、阿闍梨 Padma ḷbyun gnas が著作したと述べる。この Padma ḷbyun gnas は 8 世紀半後半にチベットへ招かれたウディヤーナの Padmasambhava であるかどうか確定できない。

105 奥書 (DE. 70b; PE. 323a) は「Ra sañi gtsug lag khañ gi ḷod mchog dðos grub gtsug lag khañ」を記す。

106 DNG, ka. 17a は剣経と同解訳名を挙げている。

107 この点に関しては、羽田野 1965b, pp. 172-176 に詳しい。

108 Bañi ston については、KCS, 79a-80a を参照。

109 その手紙は長短の差はあるが、多くの史書で引用されている（cf. NGA, 68b; JNY, 57a-58a; KCS, 89a-90a; DNG, ca. 7a; KGT, da, pp. 301-302）。

110 NGA, 97a は sÑe thañ に合わせて 8 年住んだというが、これは後に挿入された細字の注記である。

111 Gar mi g-Yon druñ (NGA, 91b)。Gar mi については、羽田野 1956, pp. 9-13 を参照。

112 A mes については、DNG, ca. 12a を参照。

113 Phyag については、KCS, 71b-74a を参照。

114 DNG, kha. 4b.

115 藤田 1979, pp. 80-79 は徳光の戒品の敦煌写本（Foussin Catalogue No. 632）と剣経本 [D. 4045: P. 5546] とを照合した結果、両本にはサンスクリット原本とその翻訳者の相違とか解釈をどう定めるべき個体は全く無いと述べ、剣経本が旧訳であることを保証する。

116 JNY, 86a; DNG, ca. 10a; KCS, 65a。ただし、NGA, 99b は十干を記さず、「午の年」という。

〈略号一覧〉


DNG: ḷGos gShon nu dpal, "Deb ther sñon po", The Blue Annals, New Delhi, 1976.

JNY: mChims thams cad mñhyen pa, "Jo bo rin po che rje dpal Idan a ti sañi rnam thar rgyas

KCS: Las chen Kun dga’i rgyal mtshan, “bKa’i gdams chos ḡbyuṅ gsal baṅ sgron rme”, Bibliothèque Nationale de Paris所藏


NGA: Bya ḡdul ḡsins brTson ḡgrus ḡbar, “Jo bo rje dpal ldan mar me mdsad ye ḡes kyi rnam thar ḡryan pa”, 東北大学附属図書館所蔵


DE: Derge Edition (台湾刊行本)

PE: Peking Edition (銘木学術財団刊行本)


Chattopadhyaya 1967: Chattopadhyaya, A., Atiśa and Tibet, Delhi.

Chaudhary 1975: Chaudhary, R., The University of Vikramaśīla, Patna.


Dutt 1962: Dutt, S., Buddhist Monks and Monasteries of India, London.


Eimer 1979a: Eimer, H., Rnam thar nyogs pa: Materialien zu einer Biographie des Atiśa
(Dīpankaraśrījñāna), Teil 1, Wiesbaden.


江島1980：江鳥惠教「中観思想の展開」春秋社

江島1983：江鳥惠教「アティーシャの二真理説」「龍樹の學の研究」大藏出版：339-391.

江島1990：江鳥惠教「Bhāvanīvēka/Bhavya/Bhāvīvēka」「印度学仏教学研究」38-2; 846–838

川越1993：川越英真「Dīpankara-rākṣitaについて」「密の道教の仏教と科学」仏教出版：455–471.

羽田野1959：羽田野田貴雄「密教者としてのアティーシャとくに時輪の問題をめぐって」「宗教研究」33-1: 14–52.

羽田野1960：羽田野田貴雄「密教者としてのアティーシャ」「中野教授古稀記念論文集」中野教授古稀記念会編・刊：145-163.

羽田野1965a：羽田野田貴雄「衛へのアティーシャの派遣とその背景と歴史的意義」「密教学密教史論文集」高野山大学編・刊：411-428.

羽田野1965b：羽田野田貴雄「チベットにおける仏教観の形成について」「文化」29-2 ; 165–195.

羽田野1966：羽田野田貴雄「アティーシャおぼえ書・年代考」「印度学仏教学論集」平楽寺書店 ; 439-460.

藤田1979：藤田光寛「敦煌出土瑜伽論チベット語遺文I」「密教文化」126 ; 80–63.